を調べて見ると，フタスデシマメイガ *Herculia glaucinalis* L. ?らしい。
やはり腹部が食はれ居た。

c. 以上小生が観察した範囲内では，ザトウムシは昆蟲(成蟲)の腹部を好んで食ふらしく，又食ふ時には，昆蟲の頭部をザトウムシの前方に向けて即ち向き合つて食ふと云ふ事も特に記して置きたい。

尙福井縣のザトウムシ類に關しては，稿を新にして記したいと思つてゐる。

(昭和十一年八月二十三日認)

KOMATU, T. On the habit of *Myrmarachne*
innermichelis Boesenberg et Strand.

ク ロ ア リ グ モ の 習 性

小 松 敏 宏

長野縣諏訪郡北山村

(昭和十一年八月三十日受領)

今でも深い印象として残つてゐるが，記録に據ると昭和五年六月三日，長野市（佛都として著名な）閑靜な下宿屋の裏庭で始めてこの蜘蛛の活潑な動作を観察したのであつた。

庭の一隅に南天の藪があり，向ひに傾いた榴の老木がある。榴の長く差延べた枝が低く枝垂れて，南天と一米ばかりの間隔をなしてゐる。

顔を洗つて浮圖顔を上げた時，日の光にチラリと輝く南天から榴の枝へかけての遊糸が目についた。南天の葉の上では丁度クロアリグモ *Myrmarachne innermichelis* Boesenberg et Strand が流した糸を手繰つてゐる時であつた。

やがて手應へありと見た蜘蛛は、葉から離れて細い細い糸を傳り始めた。水のように澄み切った空氣の、僅かな動きにも摩く一條の糸と、それを傳ふ黒い小さな蜘蛛の姿は實に印象的であつた。その記録には次の様な觀察が附記せられてゐる。

「その蜘蛛は第四步脚を擴げて、彼の蛛疣から新しく紡がれる糸に絶対に觸れぬ。彼は前の糸を手繰る。傳つて行くのではなくて手繰つて、第二第三步脚で丸めて小さな珠を作る。」

爾來既に數年を関するのであるが、種々な憶説を確める意味をも兼ねて、

(註. *Mirmarachne* 屬に就いては現在まで何等の正確なる觀察記録はないのである)

絶えず注意もし、飼育による實驗觀察も行つて見た。然し習性研究は、調べれば調べる程、所謂廣い變異性を示して仲々全貌を見極める事は困難である。唯、現在までのところより歸納して、蟻の巢等へ浸入する等は考へられないとは、まづ斷言して差支へない。即ちこの蜘蛛の外貌が蟻に似てゐると云ふ形態學上の事實は習性學上、外敵に對して擬態による自己保護以上には役立たないと云ひたいのである。

(註. ベツカウ蜂等のこの蜘蛛を狩るのを、未だ觀察しない。他のハエトリグモ類は實に屢この災厄に逢ふもので、其の一部の觀察は「昆蟲世界」第404號に發表してある。)

1. 住居 尋常の場合は、彷徨の途次暮方になると、凹所を求めて僅かな糸を紡いて天幕を作り一夜の宿とする。最も好むは禾本科の穂狀を呈する葉、特に橋狀を呈する部分、外の多くの可撓性の小葉、飼育に依れば自分の嘗て作つた住居、他の蜘蛛の作つたもので既に放棄せられた住居を流用する場合が尠くない。

徘徊中にも捨てられた巢を見つけると、一寸立寄つて休息する。既に他の一匹が占有してゐる天幕を攻撃して自己のものとする場合も見られ、各場合を記述するは冗長の謗りを受けやう。要するに出來得る限り糸を節約しやうとする傾向は著しいものがある。

住居の型は一般に長卵形を呈し、身を容るるに足る程度の大さ。天幕のみで床は紡がない。産卵越冬の際のものは其の項で述べやう。

2. 食性 強い趨光性を示し、日當りの良い草原乃至明るい森林内に多い。地上を歩むは甚だ稀で、樹上數米の高所へも登る。

獲物は微小な昆蟲、特に葉裏に潜む蚊等であつて、行動は實に怯懦である。捕蟲法も他のハエトリグモ科 Fam Salticidae の多くに見る様な著しい跳躍はしない。得た獲物は糸を絡めず、咀嚼する傾向がある。

附近に多いアリマキは甘露を排泄するが、下にある葉面に附着したその液汁を、蟻と等しく甜る事を好む。但しアリマキを捕食し、或は蟻に見るが如き、直接これを彼より給與せらるゝ如き事は野外觀察、飼育器内の實驗等より歸納して無いと云へやう。

3. 性性 當地方に於ては、六月下旬頃より成熟する。一般蜘蛛類と等しく平均♂の方が早い。成熟した♂は専ら♀の亞成體の住居を搜す。

一方亞成體の♀は適當な所、例へば楓、槐、藤等の如き込み入つた葉を綴り合せ、或はフクログモ科 Fam Clubionidae のうちチマキを作る種類である *Chiracanth'un* ; *Clubiona* 等の捨てた住居を修理して最後の脱皮に備へる。

(註 自分自身ではチマキを作る能力はない。)

♂が♀の住居を訪問して、♀の脱皮を完了するまでの間同居するが、兩者の間には相當厚い蛛糸による白膜が作られる。多分♀に依り紡がれたものであらうが、屢一部分♂に破られて、更に修理されたものが多い。この例は三つもつてゐるが、二つの例はススキの葉につくられたフクログモの住居を流用したもの、他の一例は槐の葉の綴り合せたものであつた。

♀の脱皮完了までに♂の訪問を受けなかつた際は、♀は其後時々作る住居に於て♂を待つ。飼育に據ると、彷徨中の♀に對しても♂は執拗な威示運動をする場合が多いが、成功しなかつた。一匹の♀に對して大小二種の♂ (體長は頗る廣い變異を示す) を配すると、余の觀察に於ては常に小形の♂は大形の♂に對

して劣勢であつて、大形の♂に逢ふと周章として逃去るのであつた。

脱皮の爲の住居内に於て行はれる場合は、所詮観察不可能であるが、遁れ出た♂が左右の第一歩脚を失つてゐた例を見た。憶ふに、逃口の無い場合は當然♀の飼食となつて仕舞ふのであらう。

脱皮完了後の♀の假の住居内にて行はれた會合の三回の觀察は、一例では早朝既に終り、♂は左の第一歩脚を失つてゐた。(1931. 7. Jul.)。次の例では正午頃行はれ、(1931. 12. Jul.)。第三の例では午後五時半頃行はれた。(1933. 1. Jul.)。形式は何れも大差なかつた故、第三の例を精述して見やう。

時 1933. 1. Jul. 所 諏訪郡上諏訪町。

20Cm×10Cm×8Cm 程度の一面硝子、他の五面は木製の飼育器に、成熟した♀♂を各一匹宛放して置いた。♀は♂に逢ふ度びに、歩行を止めて其の方を注視し乍ら第一歩脚を

クロアリゲモ

Mirmarachne innermichelis Botsenberg et Strand(原圖)

上げる。併し♀は取合はない。

間もなく夕方となつた爲か、♀は硝子に面する一隅に長徑1.5Cm 程の住居を作つた。勿論前述の通り天幕のみで床は絨がない。従つて硝子を通して充分天幕内の動作を觀察出来る。時に Pm 5. 45 外は未だ夕日が照つてゐる。

♀は盛に腹部を左右に振り乍ら糸を紡いでゐたが、軀て作り終へて歩脚の掃除も終つた頃、♂が箱の隅から隅と傳つて、偶然其所へ通りかゝつた。Pm 6.15

♂は内に♀のゐるのを覺ると躊躇なく、勇敢に黒くて長大な

大顎（第一圖参照）を稍々擴げて、巢口に突き入れた。♀はこの♂に對して喰ひかゝつて行つた。が何分にも♂の大顎は強大な爲に齒が立たない。暫くの後、この試みを止めてしまつた。——尙、現在のところ、この蜘蛛の♂のみ斯くも大顎の巨大なる所以は、習性學上この點以外には求められない。♂が、屢第一步脚を失ふ理由も亦何時でも♀の攻撃を防禦する爲に大顎を使用する爲誤つて第一步脚をもぎ取られる機会が多いのである。

♂は纏て♀の左側の歩脚の下を潜つて、自分の頭胸を相手の腹側まで進める。次に自分の左側の一二の歩脚のみで相手の腹部を跨ぐ。♀の腹部を附屬肢で自分の方へ振まげて相手の epigynum へ附屬肢を宛合ふ。Pm 6. 17（第二圖参照）

Pm 6. 19 ♂は後退して♂より離れ再び相手の右側へ潛入して同様な動作を繰返す。

（所要時間大約二分）離れて更に再び左側に代へ、右側にうつる。と突然♂は♀から離れてその住居を辭して行つた。Pm 6. 26

クロアリグモ *M. innermichelis*
の交尾臨型 下面より見たるもの。(原圖)

別居せしめた♂は全く喪心の態で其後四日目の五日に斃れた。♀は七月十二日に與へられた紙片の間に卵囊を作つた。一般に八月に入れば♂の姿は見られない。

4. 産卵性 多くのハエトリグモ科Fam. Salticidaeのものと同様、日當りの良い細かい葉の重り合つたところ、フクログモ科の捨てたチマキ樹皮下等へ白色糸をもつて厚い壁の部屋を作る。勿論この際は床の部分へも布を敷いてその一部へ産卵する。卵囊は圓盤状、卵數三十粒内外。産卵後の雌は仔の孵化までその

内部に居住して保護に任じてゐる。仔蜘蛛の出産後再び徘徊するも食欲に見る可きものなく、八月下旬には一匹も認める事は出来ない。余の記録中 1931. 25. Aug., が最終のものである。

5. 越冬 巢立つた仔蜘蛛は體色は赤褐色味の強い黒色であつて、動作活潑越冬に入るに先立つて大凡成熟せるものに近い程度にまで發育する。

十月初旬頃より凋落の秋に先立つて次第に姿を消し、下旬に至れば全く其の姿を見る事が出来ない。住居は白色糸をもつて拵らへられた長經 1^{cm}程の辛じて身を入れ得る程度の筒状乃至繭狀の袋で、南向の日當りよい樹皮下に多い。

翌春五月の初めに至つて住居を見捨てる。最初の記録は 1933, 28, Apr., である。

6. 蟻との關係 本州に最も普通なトビイロケアリ *Lasius niger* Linnaeus, クロヤマアリ *Formica fusca* var. *japonica* Motschulsky 等の徘徊する邊りに多く生活する。但し、蟻巢内への侵入や強奪等は全く見られない。蟻の附近に多い理由は、一應兩者とも日光を好む事によつて起る偶然の一致とも解せられ、又一面クロアリグモがアリマキの甘露を好む故の一致とも解せられる。

然して一般に蜘蛛は、狩獵性占座性を問はず、蟻の勢力範圍内に生活する事は困難である。蟻は實に熱心な蜘蛛の攻撃者である。

(註. この點に就いての興味ある觀察はいづれ發表の機會があらう。)

事實クロアリグモは蟻に出合ふと、素早く遠ざかる。蟻の巢の近くの樹立ではこれが實に頻繁である。が然し、蟻のゐない所でも立派に生活して行けるクロアリグモは、決して蟻のゐないところへは行きはしない。これは實に前述の二つの理由に加へるに、摸倣者は必ず被摸倣者の附近に棲息すると云ふ、擬態の一般法則に従ふ故であらう。

終りに種の査定を忝ふした岸田久吉先生、竝に植村利夫氏に對し深き感謝の意を捧げます。

(1936. viii. 20.)